

健康通信 しずおか

No.70

2019
5月

TRANSITION TO HEALTH (070)

電磁波環境と健康被害 ⑥

～ “優先席付近での携帯電話マナー” の緩和、これで大丈夫か？ ～

はじめに

私は夜遅く静鉄電車を利用することがあるが、乗客の8割以上がスマホを操作していることに驚かされる。乗客の多くが、ただひたすら黙々とスマホを操作している。“通話はしていない、音は漏らさずイヤホンを使っている、誰にも迷惑をかけていない”という感覚でいるのであろう。座席が空いていても、スマホを操作している乗客の隣には、私は座らない。スマホ操作中の人の隣に数分間座っているだけで、私の脳は熱くなるのを感じ、クラクラするなどの不快な症状が出てくるのである。私の身体は危険な人工マイクロ波に正常に反応するのである。自然界の動物のように。

さて今号では、公共交通機関・電車の「優先席と携帯電話マナー」についてお話ししましょう。

優先席と携帯電話マナー

電車などの優先席で、なぜ携帯電話（スマホ、タブレット含む）は『電源オフ』にしなければならないとされてきたのか。法制度上は『電源をオフ』にしなくても違反ではなく、公共交通機関の会社のキャンペーン、エチケット・マナーに過ぎなかったという。

無線電波を管轄しているのは総務省であり、そのガイドラインの「心臓ペースメーカーへの影響」については、今まで、1996年には「22センチ」以上なら影響なし、その後、2013年「15センチ」、2014年「影響なし」とされてきた。

総務省は2015年6月23日、「各種電波利用機器の電波が植込み型医療機器へ及ぼす影響を防止するための指針」（改訂）を発表した。これを契機に、公共交通機関である鉄道・バス会社が求めた「優先席付近での『携帯電話の電源オフ』のルールが緩和されてきた。

鉄道各社は、『携帯電話の電波が心臓ペースメーカーに与える影響は非常に低い』とする総務省の指針を受けて、優先席での携帯電話の利用マナーの見直しを2015年9月に発表した。

現在、JRは『優先席付近では、混雑時には電源をオフに』と呼びかけている。静鉄電車も同様に『優先席付近では混雑時には電源をお切りください』と『混雑時 OFF』を呼びかけている。

このような対応の変化、エチケット・マナーのルールの緩和を、優先席に座る利用者も歓迎（静岡鉄道 HP より）しているようである。混雑していなければ、優先席付近でも、優先席に座りながらでも、声を出して



□ 携帯電話（スマートフォン含む）の通話をご遠慮ください。
優先席付近では混雑時には電源をお切りください。
それ以外では、マナーモードなどに設定のうえ、通話をご遠慮ください。

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原 6 丁目 8 番 1 号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

通話をしなければ、携帯電話・スマホを『マナーモード』で使ってよいのである。車両内では「① 原則マナーモード、② 優先席付近・混雑時は電源オフ ③ 優先席付近・非混雑時はマナーモードでも可」ということになる。

心臓ペースメーカーに対する携帯電話・スマホの影響

ペースメーカーに詳しい循環器専門医・大学教授らが「携帯電話による心臓ペースメーカーの誤作動の報告は世界で1件もなくゼロで、安全である」と主張するように、現在では、携帯電話・スマホの電磁波が医療機器に及ぼす影響が見直され、病院の待合室や病室での携帯電話・スマホの操作が可能になっている。

声を出しての通話しかできなかった昔の携帯電話の時代と違い、現在の携帯電話（ガラケー）・スマホでは、外に音を出すことなく無音で、家族・友人・会社との連絡ができ、検索もでき、好きな音楽・動画もイヤホンを使って楽しむ、周囲の人に迷惑をかけることなどない。心臓ペースメーカーなどの植込み型医療機器への影響（誤作動）も無いのだから、『混雑時でもマナーモード』でよいのではないか、という一般国民の意見が出てきそうである。

優先席に座る妊婦・赤ちゃんに対する携帯電話・スマホの影響

優先席付近であろうと、『通話を控える』『マナーモード』の2つを守れば、公共交通機関での「車両内のエチケット・マナー」の問題は解決するように思えるのではなかろうか。

しかし、これまで私が執筆してきた「健康通信しずおか」を読まれてきた方々は既にお気づきであろう。携帯電話・スマホのマイクロ波の「DNA切断、脳腫瘍・白血病などの発がん性」の問題には全く触れられず、無視され、議論されてこなかったのである。

左の2つの表は、携帯電話のマイクロ波の「発がん性」に関する歴史のほんの一部を示したものである。自然界に存在するアナログ電磁波の場合と違い、「人工的につくられたデジタル電磁波（マイクロ波）を浴びてしまうと、白血病・脳腫瘍などのがん発症率が格段に高まってしまう」ということは世界の常識である。

日本の国立環境研究所（2003年）も、ノーベル医学生理学賞の選定で知られるスウェーデンのカロリンスカ研究所（2004年）も、WHOの下部組織・IARC国際がん研究機関（2011年）も警告を発してきた。一般の人々の中に

はスマホの強烈なマイクロ波になぜか鈍感な人も多いようである。・・・だから20分も30分も、ひどいと1時間以上もスマホを触り続けられるのであろう。自分自身のDNAがズタズタに切断されているかもしれないというのに、鈍感で何も感じない（？）症状も出ない（？）・・・しかし、スマホのマイクロ波に発がん性があることは世界中の複数の信頼ある研究機関が報告・立証済みの事実である。もし、優先席に妊婦さんが座っていたら、赤ちゃんを抱っこしている母親がいたら、混雑していなくても、『電源をオフ』にすべきと考える。『マナーモードでは不十分』である。優先席の前に立ったあなたのスマホの電磁波が、胎児・赤ちゃんのDNAを傷つけているかもしれないからだ。あってはならないことだが、もし、スマホを操作している無知な妊婦さん、赤ちゃんを抱っこしながらスマホを操作している無知な母親を見かけたら、『勇氣』と『優しさ』をもって、『電源オフ』を奨めてほしいものである。

おわりに

日本人は「霊性が高い」といわれながらも、多くの人々が、結果（＝真実）が出ていても、今までの定説とは異なる眼に見えない現象・理論は信じようとせず、権威ある機関が認めないと「気のせい」「たまたま」「詐欺だ」といって信じない。まこと残念な国民性である。スマホのマイクロ波の有害なエネルギー・波動は、鈍感な人には感じられないのかもしれないが、明らかに有害・危険である。スマホの健康被害を回避できると期待される生体エネルギー® 技術を応用して開発されたスマホ対応の充電器・誘導翻訳器『天音S』がICI研究所から発売されているので、使ってみるのも1つの方法・リスク管理である。（No.69参照）

携帯電話のマイクロ波の発がん性

- ・1995年 科学誌 ランセット（11月号）
「4mG超で小児ガンが5.6倍増える」
- ・1996年 イギリス「サンデー・タイムズ」紙（4月14日）
「携帯電話があなたの脳を'調理'する」と警告
- ・2000年 ドイツ 子どもの携帯電話の使用制限を勧告
- ・2002年 ロシア 16歳未満の子ども・
妊婦の携帯電話の使用を禁止
- ・2005年 アメリカ「携帯電話による脳腫瘍」が労災認定される

携帯電話・スマートフォン

マイクロ波に『発がん性』あり

- ・「2時間のマイクロ波照射で、脳のDNA切断が6割増える」[1995]
- ・2004年 カロリンスカ研究所（スウェーデン）
「10年以上、携帯電話を使用すると、
脳腫瘍が3.9倍増える」
ノーベル
医学生理学賞
選定機関
- ・「携帯電話使用⇒脳腫瘍発生」という事実
を世界中の複数の研究報告が立証している。

国立環境研究所 発表(2003年)

4 ミリガウス以上
の場所で暮らす子どもは
0.5ミリガウス未満の場所で暮らす子どもに比べ
白血病 … 4.73 倍
脳腫瘍 … 10.6 倍

携帯電話の発癌性 WHO警告

IARC 国際がん研究機関2011年5月31日

悪性脳腫瘍の発生
1日30分、10年で
成人 … 1.4 倍
若年者 … 5 倍!
(幼少期より使用)

